

深井清水町C遺跡

主要地方道下石津泉ヶ丘線立体交差事業に伴う調査



2005年3月

大阪府教育委員会

序 文

深井清水町C遺跡は、主要地方道下石津泉ヶ丘線（泉北1号線）立体交差事業に先立ち、平成14年度に実施した試掘調査で新たに発見された遺跡です。現在泉北高速鉄道深井駅前となっているこの場所は、泉北丘陵の縁辺部にあたり、ニュータウン開発以前は田畠と山林の間に溜池が点在する緑濃い田園地帯でした。付近には史跡土塔や野々宮神社などの歴史的遺産が知られ、南に広がる丘陵一帯にはかつて日本最大の須恵器生産地だった陶邑窯跡群が展開していました。

このたびの調査では、狭い範囲であったにもかかわらず、付近ではこれまであまり知られていないかった古墳時代後期から飛鳥時代の遺構、遺物が検出されました。都市化の著しい当地の歴史を解明する新たな資料となることでしょう。

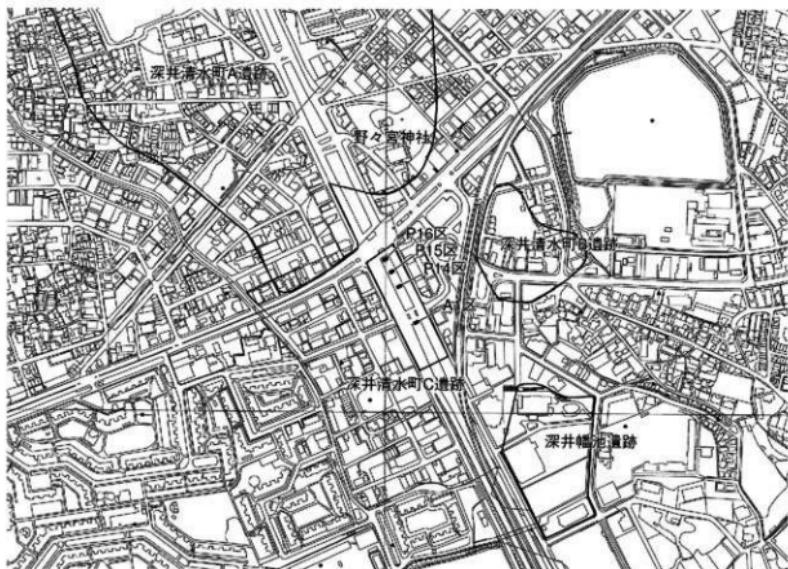
調査の実施にあたり、ご協力いただいた地元の皆様と関係機関に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化財の保護にご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成17年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 向井正博

例 言

1. 本書は、主要地方道下石津泉ヶ丘線立体交差事業に伴う、堺市深井清水町所在、深井清水町C遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査と遺物整理は、大阪府土木部の依頼を受けて大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。
3. 調査は文化財保護課調査第二グループ総括主査広瀬雅信を担当者として平成16年5月10日から同年6月7日まで実施した。遺物整理は調査管理グループ技師林口佐子、同藤田道子が担当した。本書は、広瀬が執筆、編集した。
4. 調査に伴う基準・水準点測量は(株)GIS関西に、遺物の写真撮影は(有)阿南写真工房に委託して実施した。
5. 発掘調査及び遺物整理に要した経費は、全額大阪府土木部が負担した。
6. 本書は300部作成し、1部あたりの単価は252円である。



第1図 調査区位置図 (1:10,000)

立地と周辺の遺跡

当遺跡が所在する堺市深井清水町は、泉北丘陵の北側縁辺にあたり、地形は北に向かって傾斜している。現地盤の標高はT.P.+30m前後であるが、開発に伴って谷を埋め立てている場所では相当の盛土が施されている。

周知のとおり、泉北丘陵には陶邑窯跡群が広く分布している。当遺跡近くには須恵器生産と関わりが深いとされる陶器遺跡、陶器南遺跡、陶器千塚があり、ほ場整備に伴う調査が継続されている。

付近の深井清水町A遺跡では土坑から奈良・平安・鎌倉時代の遺物が多数出土しており、野々宮神社との関連が指摘されている。深井清水町B遺跡では奈良時代の土坑から土師器・須恵器・土馬などが出土しており、出土状態から、祭祀的意味合いが強調され、「行基年譜」に見える「深井尼院」と大野寺跡・土塔の存在から行基との関連を示唆する考えが示されている。深井幡池遺跡では、5世紀代の須恵器の窯跡と8世紀代の土師器の窯跡が検出された。

調査結果

計画されていた5基の橋脚のうち、谷地形に当たる1基を除く4か所をトレンチ調査した。一帯は道路建設に際して、1.5~2.5mにおよぶ盛土が施されており、旧地形はかなり改変されている。

調査区は橋脚番号からA-1区、P-16・17・18区と呼ぶ。

A-1区は、丘陵から谷に向かって下がる部分と考えられるが、道路建設以前にかなり削平を受けてい

るらしく、旧耕土から須恵器、土師器、瓦器の小片がわずかに出土したにとどまる。

P-17・18区は谷の斜面あるいは溜池の中と考えられ、溜水状態で堆積したと考えられる暗灰色砂質土が遺物包含層となる。遺構は検出されず、包含層に含まれる遺物も古墳時代から室町時代にかけての摩滅した土器の細片が混在する状態だった。

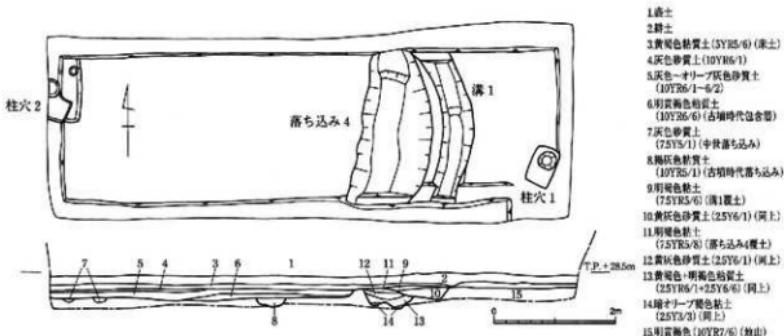
P-16区（第2図、図版1）

道路建設に伴う2m近い盛土が全面に施されている。調査区東半では、現代の耕土に伴う床土の直下で明褐色粘土の地山が、西半では中世の耕作土と考えられる土層が確認され、この層の下層に明黄褐色粘土質の古墳時代の遺物包含層が一部残っていた。遺構は全て地山面で検出した。遺構面の標高はTP.+28.1~28.3m前後である。

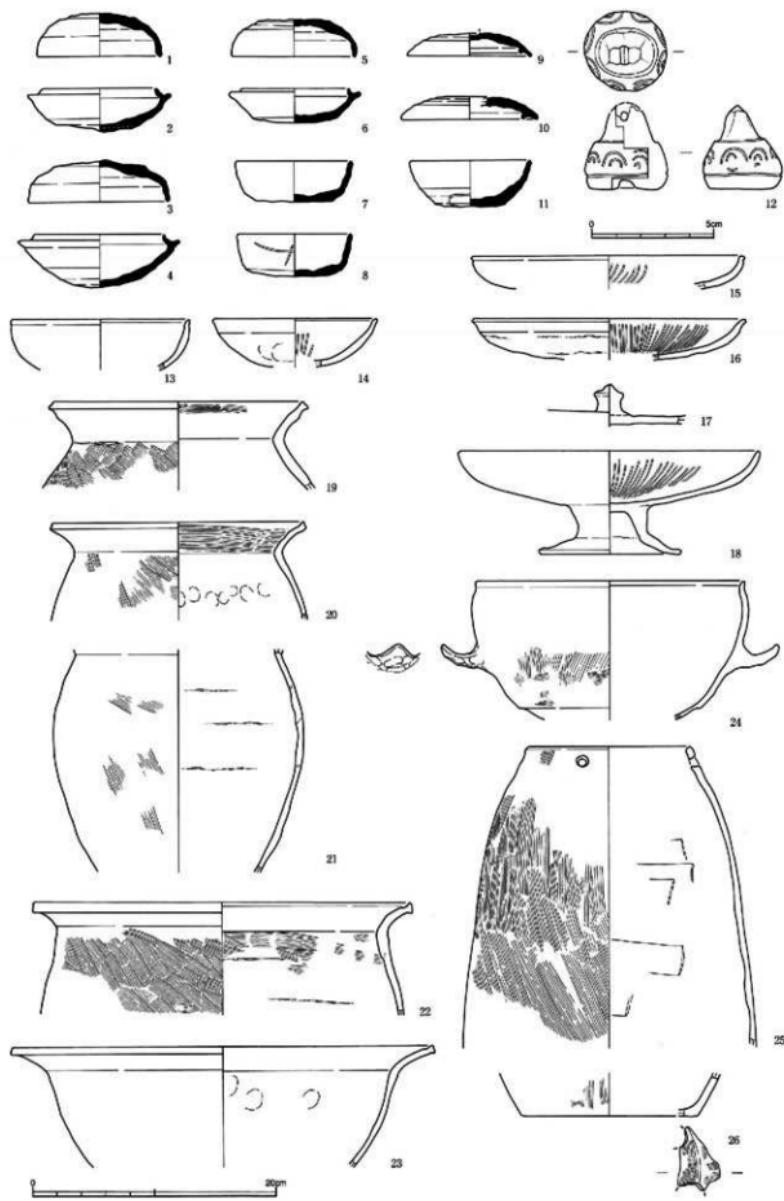
柱穴（図版1-3・4）2か所検出されたが、同一の建物を構成するものではない。柱痕径15cmほどの掘立柱穴である。掘方は長方形ないし不定形で、検出面から深さ60cmほど残っていた。柱穴1の柱痕跡は下すばまりになっており、最下部の直径は10cm弱である。柱を抜き取ったものと考えられる。時期を示す遺物としては、柱穴1の掘方埋土から須恵器（7）が出土した。

溝1、落ち込み4（図版1-5）南北方向の湾曲する溝で、幅約30cm、深さ20cmほどで、断面は逆台形を呈する。6世紀末から7世紀前半ごろの土師器・須恵器が多量に出土した（第3図、図版2）。須恵器の杯（2・4・6・8・11）、蓋（1・3・5・9・10）、土師器の杯（13・14）、皿（15・16）、蓋（17）、高杯（18）、鉢（23・24）、壺（19~22）、瓶（25・26）などで構成される。特殊なものとしては、秤の鍤である「権」に似た土師質の土製品（12、表紙写真）が出土した。つまみの一部を欠失するが、底部径3.0cm、胴部最大径3.4cm、復元高約3.5cmを測り、重量は28.8gである。胴部に重弧紋が連続して範描きされている。

落ち込み4は溝1と平行する溝状の落ち込みで、幅約80cm、深さ約30cmで、底面は凹凸があるが、断面形はU字形を呈する。覆土は溝1とよく似ている。重複関係から溝1のほうが新しいことがわかるが、出土遺物は同時期で内容も共通する。相互に接合した資料も多い。



第2図 P-16区 平面図・北壁断面図



第3図 P-16区 出土遺物実測図

まとめ

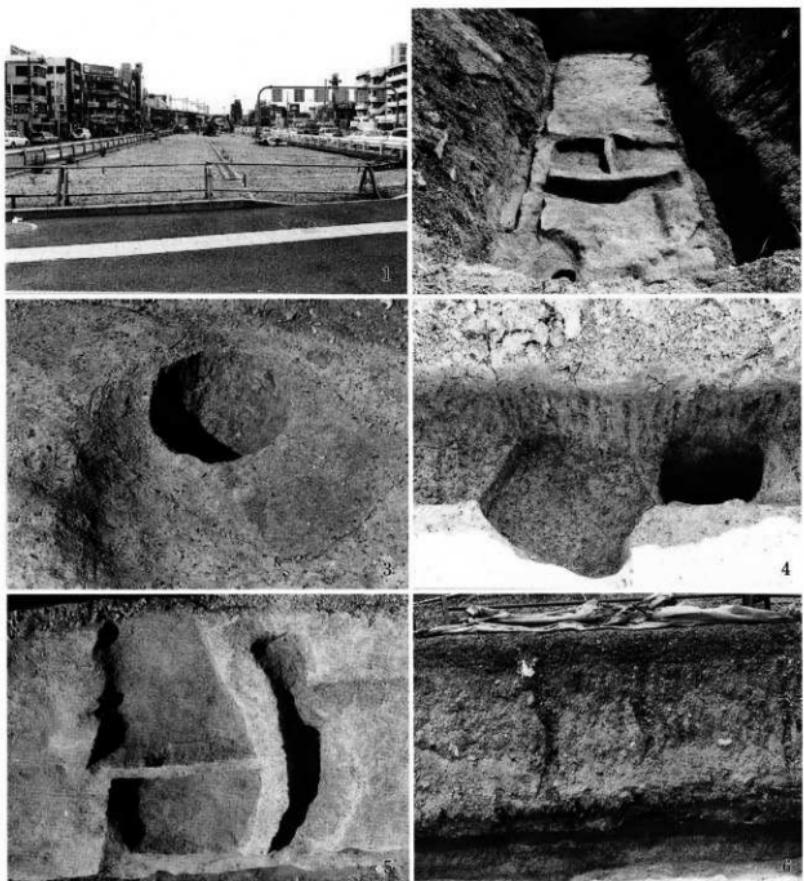
深井清水町A・B遺跡の既往の調査では、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構が確認されており、深井橋池遺跡では8世紀の上部器窯跡が確認されている。今回やや古い時期の遺構が確認されたことになる。立ち上がりを持つ須恵器蓋杯の身と蓋が逆転する時期をはさんでいる。

棹秤の鍼である「櫛」を模した土製品や石製品はいくつか類例が知られており、実用品とする説もあるが、土製品の場合重さをどのように調整したかが問題であろう。本例は底部に穴がうがたれている。摩滅が著しく、穿孔した時点を焼成前か後かを判別することは現状では難しいが、焼成後であるとすればひとつのヒントになりうるだろう。

周辺の旧地形はかなり起伏に富んでいたらしく、今回遺構が確認された範囲も谷に挟まれたきわめて狭い台地上であると考えられる。東西の広がりは不明であるが、南側は谷であり、試掘調査の結果、北側は深井の交差点を越えて広がることはないと想定される。南北の範囲は最大でも50mを超えることはなさそうである。当該地は広い意味で陶邑窯跡群に含まれるが、今回の出土遺物から見ると、この集落遺跡については須恵器生産との関連は薄いと考えられるものの、調査範囲が狭小であるため、集落の性格について云々することはできない。

報告書抄録

ふりがな	ふかいしみずちょうしーいせき						
書名	深井清水町C遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	2004-5						
編集者名	広瀬雅信						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351						
発行年月日	2005年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふかいしみずちょうしーいせき 深井清水町C遺跡	おおさかふさかいいし 大阪府堺市	201	144 34° 32'	135° 30'	04年 5月~6月	332	主要地方道下石津県ヶ丘線立体交差事業に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
ふかいしみずちょうしーいせき 深井清水町C遺跡	集落跡	古墳	獨立柱建跡・溝	土師器・須恵器 「櫛」形土製品	周辺では初めて確認された6~7世紀の遺構。		



1 調査地全景（北から）

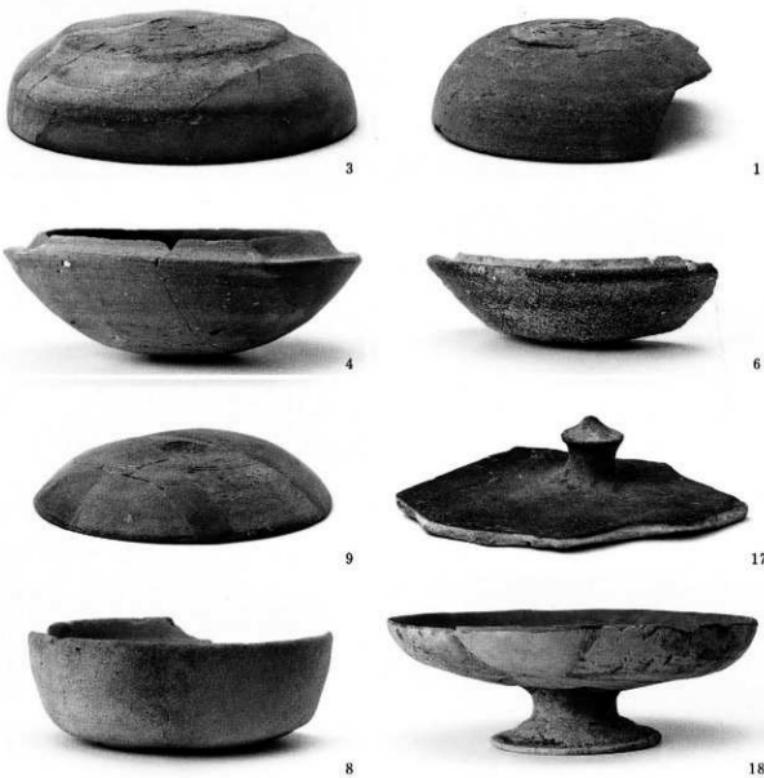
5 溝 1、落ち込み 4（南から）

2 P 16 区全景（東から）

6 北壁土層断面

3 柱穴 1

4 柱穴 2



溝1 (1、3、6、8、9、17、18)

落ち込み2 (4)

大阪府埋蔵文化財調査報告2004-5

深井清水町C遺跡

主要地方道下石津泉ヶ丘線立体交差事業に伴う調査

発行年月日／2005年3月31日

編集・発行／大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号